

人文科学研究所総合研究の記録 ―習志野騎兵連隊関連遺構について

田中 正敬

1. はじめに

本稿は、2017 年年 7 月 29 日(土)から 30 日(日)にかけて行われた専修大学人文科学研究所主催の総合研究調査の記録の一部である。7 月 29 日の午前中、約 2 時間かけて習志野市の京成大久保駅周辺をフィールドワークとして巡った。

拙稿「房総半島に残る戦争遺跡について ―人文科学研究所総合研究の記録」(『専修大学人文科学研究所月報』288、2017 年)にも記したように、東京湾および太平洋側に面した房総半島の地理的条件から千葉県には数多くの戦争関連施設が造られている。

このたびの総合研究においては、西船橋から貸切バスに乗車して習志野市まで行き、その周辺の軍事施設の遺構を筆者の案内で見学した。ただし、筆者はこの地域の専門家ではなく、説明の材料の多くを先行研究・調査に負っている⁽¹⁾。

西船橋から習志野市にかけてはいくつかの軍事関連の遺構が存在する。西船橋駅の北方にあたる行田という地域には海軍東京無線電信所船橋送信所があった。現在は撤去されているが、地図上でその区画の一部が円形の道路として確認することができる。円形道路の中心点にあたる所にはモニュメントとプレートが置かれているが、ここには 200m の高さの主塔があった。ここから半径 400m の円形道路上には 60m の支塔が 18 本立ち並んでいた。

一方、現在の京成大久保駅の周辺には、習志野原演習場をはじめとして糧秣廠倉庫や陸軍衛戍病院が置かれ、1899 年には騎兵第一・第二旅団が設置された。地域では「騎兵連隊」と呼ばれている第 13～第 16 連隊が編制されていくこととなる。江戸時代には幕府直轄の放牧場であったことから、明治期以降にも騎兵が駐屯したものである。高根木戸、新木戸などの地名は現在も残る境界の名残である。1873 年 4 月に明治天皇はこの地で大規模な軍事演習を行い、ここを習志野と命名、その後も陸軍の演習場となった。船橋市から習志野市、八千代市にもまたがる広大な敷地である。その後、騎兵連隊は日露戦争にも派遣されたが、その様子は、司馬遼太郎

(1) 具体的には、概説的なものとして山村一成「戦争と軍郷千葉」(三浦茂一編『図説 千葉県の歴史』河出書房新社、1889 年)、および千葉県歴史教育者協議会編『千葉県の戦争遺跡をあるく―戦跡ガイド&マップ』(国書刊行会、2004 年)、千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史編 近現代 2』(千葉県、2006 年)所収の諸論稿がある。また、上山和雄編著『帝都と軍隊―地域と民衆の視点から』(日本経済評論社、2002 年)もこの地域の軍事施設の由来を知る上で有用であり、執筆の参考とした。とりわけ、1978 年に結成された千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会およびそのメンバーによる諸論稿、千葉県歴史教育者協議会の方々が作成したフィールドワークの資料が、筆者の知りうることの原典となっており、本稿も断りがないかぎりこれに依拠している。

の『坂の上の雲』に、騎兵第一旅団長であった秋山好古を通じて描かれた。この地域の一部は、戦後米軍により接収され、その後警察予備隊（自衛隊）が引き継いだ。自衛隊の基地があるほかは、大学などの公共施設や民家となっている⁽²⁾。

地図：習志野騎兵連隊駐屯地（地図中央の○）



出典：千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会編『関東大震災 90 周年 千葉の「関東大震災と朝鮮人虐殺事件」を 歩く ―船橋・習志野・八千代フィールドワーク資料（改訂版）』（同会、2017 年）。

(2) 小菰崇明「『軍郷』習志野を歩く」（田中・専修大学関東大震災史研究会編『地域に学ぶ関東大震災―千葉県における朝鮮人虐殺 その解明・追悼はいかになされたか』日本経済評論社、2012 年）。

写真 1：習志野騎兵連隊駐屯地



出典：地図に同じ。

2. 総合研究習志野の行程

総合研究調査では、7月29日の9時に西船橋駅を貸切バスで出発、習志野の軍事施設の概要について説明をしながら、京成大久保駅北側にある東邦大学の近くまで貸切バスで移動した。その後、この地域を徒歩で巡った。

地図上の○で囲ったところが、騎兵第13連隊～16連隊の駐屯地である。騎兵連隊は1901年に創設され、旅団司令部はその翌年に開設された（現在の習志野市市民プラザ大久保とその南の八幡公園のあたり）。真ん中の道路を挟んで左から第13連隊と第14連隊、そして道路の右に第15連隊と第16連隊が駐屯していた（後に満州事変が起こると、第13連隊と第14連隊はこの地を離れ、そこに第15連隊と第16連隊が入った）。地図上の一番左手の三角形の区画（写真1では一番手前）には陸軍の衛戍病院が置かれた。後に国立習志野病院、2001年より千葉県済生会習志野病院となり、現在に至る。

この隣の区画の第13連隊は現在東邦大学の敷地となっている。その隣の第14連隊の区画は日本大学生産工学部津田沼キャンパス、その隣の第15連隊の区画は東邦大学附属中学校・高等学校および市営住宅など、写真では一番奥にあたる第16連隊の区画には国有地の習志野の森や関東財務局大久保住宅などが入っている。

総合研究の見学では、第13連隊から第16連隊が駐屯していた区画を巡り、軍事施設の遺構を見学した。

バスを降りて第13連隊の東邦大学の正門を入り（事前に東邦大学の許可を得ている）、右手の空地に向かった。ここには、第13連隊の石碑などがある。第13連隊碑は「騎兵第十三聯隊跡」の古い碑と、1993年に建てられた「騎兵第十三聯隊発祥之地」碑（1993年）との2つがある。新しいものは当時の船橋市長であった大橋和夫の揮毫によるものである。その他には、軍人勅諭50周年を記念して1932年に建てられた五角柱の碑があり、「武勇」、「質素」、「忠節」、「礼儀」、「信義」という南次郎の揮毫による文字がそれぞれの面に刻まれている。陸軍大将であった南次郎は、いわゆる「皇民化政策」期の朝鮮総督としても知られている。その脇には司馬遼太郎の文学碑（1996年）があり、「かつて存在せしものは／時代の価値観をこえて保存し／記念すべきものである／それが文明というものである」と司馬の自筆で刻まれている。この他、正門に入って左奥に騎兵第十六連隊の碑がある。

以上の碑はほぼ一箇所に密集しているが、この碑群のすぐ北側にも戦前の陸軍時代に建てられた木造の建物が現存しており、ほとんどの建物が失われた中であって貴重なものである（写真3）。

次に向かったのは、隣の日本大学生産工学部である。ここには第14連隊関連の碑などが残っている。東邦大学の碑がある場所から塀を挟んだ反対側に位置している。

ここにある碑の数は多い。騎兵第十四聯隊碑は、上下が欠けている「第十四聯隊発祥之地」碑（1936年）と、戦後新たに建立した「騎兵第十四聯隊之跡」碑（1987年）が二つ並んでいる（写真4の左側二つ）。「騎兵第十四聯隊発祥之地」（1987年）碑がさらにその隣にある。これ

写真2：東邦大学の石碑群



撮影：筆者による。なお、見学当日は説明で写真を撮影する余裕がなかったため、ここでは別の日に撮影したものを掲載している（以下、同じ）。

写真 3：陸軍時代の建物



写真 4：日本大学キャンパスの石碑群



も新しい碑である。その他、明治天皇の歌碑、小型の馬の彫刻、「戦車第二聯隊跡」碑などが並んでいる。騎兵第 14 連隊が満洲に転出した後、1933 年に創設された戦車第 2 連隊がこの区画に入った。碑文には、その練習部が戦車学校に発展したこと、旧満州や華北などに派遣されたこと、アジア太平洋戦争期にはビルマ、ガダルカナルに派遣、フィリピンのマニラとレイテに派遣された中隊が「玉砕」するなど悲惨な末路を辿ったことなどが記されている。

その後、習志野市民プラザ大久保で休憩。隣接する八幡公園には旅団司令部関連の門柱が移設され、公園内にはいくつかの石碑が建立されている。最も大きいものが「習志野騎兵旅団発祥之地」碑（1976 年）であり、その他に「馬頭観世音」、「軍馬忠魂碑」、「軍馬之碑」、「騎兵

第一旅団司令部跡」などの碑が置かれている。近くの大久保の商店街にも秋山好古の写真と「天地無私」の文字が刻み込まれた馬の顔をかたどった碑が建てられ、周辺の「町おこし」にも一役買っている。除幕式には千葉県知事や自衛隊の関係者まで駆けつけた。秋山を顕彰するプレートもあり、そこには「当時の日本が他のアジア諸国のように西洋列強の隷属や植民地にならなかったのは秋山兄弟の功績に負うところが大きい」と書かれている。他方、秋山が「活躍」した日露戦争の裏面で日本が朝鮮（大韓帝国）の植民地化を進めたことは一切書かれていない。建立者の近代観が現れている文言である。

休憩後、騎兵第 15 連隊、第 16 連隊の区画に移動した。東邦大・日大構内にあった連隊碑は、この地域では見られない。この区画には主に陸軍習志野学校関連の遺構がある。

陸軍習志野学校は、化学戦の研究・試験・訓練のための施設として 1933 年に設置が決まり、最終的には第 15・16 連隊が第 13・14 連隊の区画に移動した後、その跡地に置かれた。日本の軍隊において地名で呼ばれている施設は、高度な機密事項を扱う所であると言われる（中野学校、登戸研究所など）。1934 年には毒ガスの実験を行なう実験講堂が作られた（現在の習志野の森の敷地内）。毒ガスの実験室（八角形であることから「八面房」とも称される）や毒ガスの排気筒もあった。敷地は戦後、千葉大学腐敗研究所として利用されたが、これが移転した後はこれらの施設は壊され、その土台だけが残っている（写真 5）。唯一、動物慰霊碑のみが完全な形で現存するが、樹木に邪魔されて柵外から確認するのは困難である。

その後、習志野の森の脇を北上、左手にある保育所のコンクリートの駐車場は、習志野学校の車庫の跡である。さらに北上すると、突き当たりに出る。東方には習志野学校内外を分ける土手の跡と思われる盛り土が続き、すぐ右手には習志野学校の裏門の門柱が一つ残っている（写真 6）。反対側にも門柱はあったと思われるが、現存しない。門柱には金属製の取っ手がついており、扉との接合部分と思われる。門柱と地面とが接する部分には直径 7cm ほどはあると思われる太い鉄で補強されており、軍隊の堅固な建造物の規格を垣間見ることができる（写真 6 の門柱の下部から地面に刺さっている部分）。その南側の民家の庭の中には細長い箱のようなコンクリート製の衛兵所があったが、2014 年にこの民家が壊されたときに一緒に撤去されてしまった。

その後、道路を西方に歩くとすぐに雑草で覆われた空地が左手に見えてくる。案内板には泉児童公園と書かれているが遊具らしきものはなく、船のような形をした構造物が地面から顔を出しており、その階段を上ったところにはベンチが設置されている（写真 7）。これは習志野学校の弾薬庫の跡であり、その入口の遺構と推測される。本体は恐らく地中にあったであろう。それにしても、わざわざ階段を上ってベンチで休憩する人はいるのだろうか。

公園を回り込んで、再び南へ向かう。しばらく行くと右手に廃屋ではないかと思われる木造

の民家がある。以前、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の方に伺ったところでは、軍隊の建物は壁の下の部分がレンガでできているのが特徴だという。この建物も同じく壁の下部がレンガでできているものであった。

写真5：習志野学校本部のものと思われる土台（レンガ）



写真6：裏門の門柱



写真 7：泉児童公園の弾薬庫跡



3. おわりに

筆者がこの地域に関心を持つようになったのは、1923 年の関東大震災朝鮮人虐殺を研究テーマに選び、その調査の中で前述の「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会」の方々に出会ったことがきっかけであった。

冒頭に紹介した拙稿に記したように、騎兵連隊は「輝かしい歴史」ばかりで彩られているわけではない。1923 年の関東大震災時に、千葉県駐屯の軍隊は東京や横浜方面に出動した。これが朝鮮人虐殺の主体の一つとなったことは、すでに研究の中で明らかにされており、朝鮮人虐殺について記された政府の公文書にも複数、習志野の騎兵連隊が登場する。だが、これまで見たとおり大久保における碑文等には一切、騎兵連隊の加害の事実は登場しない。また、「習志野の森」が以前はいかなる施設であったかについても、それを知ることができる説明板などはない。日本が化学戦で使用した毒ガスは、「大久野島で製造し、小倉で詰め、習志野で訓練し、中国で使った」と言われる。「習志野学校」が毒ガスの訓練施設であったことが知られると、それは過去の加害の問題を浮き彫りにすると同時に、現在に対する近隣住民の不安ももたらしかねない。こうした事実は何もしないままではいずれ失われていくであろう。しかし、これをいかに後に伝えるのかについてはこうした困難な課題もある。

それに加えて遺構自体の存続が危うくなっているという問題がある。衛兵所の撤去はその象徴的な事例であるし、最後に見た民家もいずれ取り壊されるのではないかとと思われる。幸いにして東邦大学内の建物は保存の方向で検討が進められていると聞いているが、いずれにせよ、現在残っている遺構についてのきちんとした調査が必要であろう。